

北見薄荷年表

江戸時代初期(1600年～) 薄荷草は中国から移入(最初に、僧が山城(京都)に持ち込んだという説と中国人による諫早(長崎)説とがある)

文化14年(1871年) 先進地の岡山県で薄荷栽培がはじまる

安政元年(1854年) 広島県で栽培開始

山形県でも栽培、その後最盛となる

明治17年(1884年) 北海道で初めて、日高門別で薄荷の試作をするが消滅

18年(1885年) 八雲の徳川農場で栽培したが、数年後に消滅

24年(1891年) 永山(旭川)の石山伝右衛門が山形県から薄荷を移入栽培

26年(1893年) 湧別の渡部精司が永山から種根を取り寄せ栽培

30年(1897年) 北見の夜明け(北光社移民団、屯田兵の入り)

31年(1898年) 全道の統計に薄荷作付6反歩(60アール)初記録

32年(1899年) 北光社で薄荷2畝(2アール)試作

遠軽の小山田利七が山形から天水釜を持ち帰り蒸溜

34年(1901年) 北見地方で薄荷栽培が急速に普及(屯田兵を中心に)

36年(1903年) 薄荷栽培の盛況による種根成金の出現

37年(1904年) 薄荷は主要作物としての地位獲得

40年(1907年) 本州大手薄荷商人が、買い付けの出張所開設

44年(1911年) 鉄道開通、人口増、好景気で野付牛(北見)は薄荷ブーム

協定商人以外の商人の集荷参入により薄荷の高騰

薄荷農民とサミュエル商会との間で一手委託契約

45年(1912年) これを探知した協定商人が高値買いに出て、価格高騰

(大正元年) サミュエル事件起こる(取引契約に関し裁判へ発展)

大正 2年(1913年) 天水釜(明治末まで)が、蛇管式になって大正中期まで使用

3年(1914年) 記録的な安値の出現(大手商人による安値協定)

4年(1915年) サミュエル裁判(大正12年まで続く)

8年(1919年) 豆類の作付け急増、薄荷は減少するが、思惑買いで価格暴騰

薄荷景気により北見、周辺市街地に活気をもたらす

箱蒸籠型蒸溜機が昭和初期まで使用される

12年(1923年) 関東大震災で横浜の貯蔵薄荷300トンが焼失

13年(1924年) 大震災の品不足で薄荷が高値、薄荷成金を生む

和種薄荷「あかまる」を優良品種に指定(農業試験場)

15年(1926年) 薄荷の作付け面積急増

(昭和元年) 産業組合運動起こる

昭和 2年(1927年) 道営薄荷取卸油検査開始

5年(1930年) 田中式薄荷蒸溜機特許獲得

6年(1931年) ホクレン支所設置、薄荷の取扱い開始

7年(1932年) ホクレン総会で薄荷工場設置を可決

和種薄荷「きたみしろけ」を優良品種に指定

8年(1933年) 工場の建設工事に着手(9月)、竣工(11月)

9年(1934年) 薄荷工場落成式(8月)

新工場から薄荷脳10箱アメリカへ初輸入(10月)

10年(1935年) 北工式蒸溜機(1号)が、昭和17年頃まで使われる

11年(1936年) 薄荷工場へ勅使御差遣される

12年(1937年) 北見地方の取卸油生産量史上最高(800トン)

13年(1938年) 和種薄荷「ほくしん」を優良品種に指定

14年(1939年) 北見工場から薄荷脳、薄荷油合計336トンを輸出

北見薄荷が世界市場の7割を占める

管内の作付け面積2万ヘクタールで薄荷史上最高となる

15年(1940年) 日本輸出農産物株会社設立

日独伊調印により米英市場への輸出激減

ブラジル薄荷の台頭



16年(1941年) 大太平洋戦争はじまる(輸出ストップ)

農地統制法制定(薄荷減反)

中国産薄荷の台頭

18年(1943年) 薄荷加工縮小整備(北見工場と神戸の工場だけ)

19年(1944年) 軍用松葉油緊急増産(薄荷蒸溜機の転用)

20年(1945年) 大太平洋戦争終わる(神戸工場は空爆を受け北見工場のみ)

22年(1947年) 薄荷の価格統制解除

北見薄荷耕作組合結成

アメリカへ戦後初の輸出(再開)薄荷脳134箱

24年(1949年) 北見地方薄荷耕作組合連合会設立

25年(1950年) 優良種苗普及のため事業施設の設置

26年(1951年) 薄荷蒸溜施設復旧整備3ヵ年計画推進

27年(1952年) 薄荷検査国営となる

北見市薄荷耕作組合主催の復興祭開く

和種薄荷「まんよう」を優良品種に指定

28年(1953年) 昭和天皇陛下行幸薄荷工場御視察

29年(1954年) 和種薄荷「すずかぜ」を優良品種に指定

31年(1956年) 洋種薄荷の委託販売は35年までがピーク

32年(1957年) 薄荷輸出振興期成会設置

作付け戦後最高1万ヘクタール、280トン

田中式蒸溜器56,57型完成

33年(1958年) 皇太子殿下(現天皇陛下)工場御視察

34年(1959年) 北見地方農協連主催「はっかまつり」

36年(1961年) 和種薄荷「おおば」を優良品種に指定

北工式蒸溜2号機、鉄製蒸溜胴の観音(片)開きも使用

大幅減収により取卸油の緊急輸入

37年(1962年) 薄荷が非自由化品目に指定

38年(1963年) 和種薄荷「ほうよう」を優良品種に指定

40年(1965年) 輸出不振、合成品により天然品市場が圧迫される

41年(1966年) 大型集中蒸溜施設の設置(3ヵ年計画)

42年(1967年) 国内相場の低迷(ポンド切り下げ)

和種薄荷「あやなみ」を優良品種に指定

43年(1968年) 合成薄荷脳が天然薄荷を圧倒

44年(1969年) 洋種薄荷(仁頃)の契約栽培(昭和50年半ばまで)

薄荷輸入自由化(暫定関税措置)実施

46年(1971年) チモールを原料とする合成薄荷脳発売

47年(1972年) 和種薄荷「わせなみ」を優良品種に指定

48年(1973年) 関税延長決定

49年(1974年) 石油ショックにより薄荷脳の価格高騰

50年(1975年) 和種薄荷「さやかぜ」を優良品種に指定

道産薄荷は市場から姿を消す

57年(1982年) 和種薄荷「ほくと」を優良品種に指定

58年(1983年) ホクレン北見薄荷工場閉場式

中国産薄荷取卸油の輸入増(日本の加工業)

61年(1986年) 旧工場の事務所を改修「北見ハッカ記念館」オープン

平成 6年(1994年) 薄荷の主産地仁頃の民家を「ハッカ御殿」として保存

9年(1997年) 河川敷に市民参加の「香りキャンセ公園」年々大盛況

13年(2001年) 「仁頃はっか公園」(名水公園を改称)開園

中国にかわり日本産薄荷の増大

14年(2002年) 「薄荷蒸溜館」開館(期間中、毎日蒸溜実演)

16年(2004年) 蒸溜体験の「ハッカ蒸溜小屋」(田園空間整備事業)

18年(2006年) 第15回全国ハーブサミット北見大会開催

